
お前たちをぶっ潰しに来たんですが。

雷雲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前たちをぶつ潰しに来たなんですが。

【ZINEコード】

N7997M

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

夜景がきれいな街、ナイトシティに彼はいた。その名も、月牙雷斗！頭もよくて、運動神経抜群の正義の味方！まさにヒーロー！と言つのは嘘。これは、運動神経は多分いいが、頭は少し悪い、正義の味方とも言えない、なんでも屋の月牙雷斗を主人公にした、物語である。

お菓子ついて言ひて何の菓子かわからぬよな。（前書き）

黒い丸（四角？）は注目とこつ意味です。
初の作品です。

お菓子ひとつでこうした句の菓子かわからなによ。

『昔々、ある所にて、おじいさんとおばあさん……と、オタクが住んでいました。

オタクは、銃を使ったアクションゲームが好きでした。そしておじいさんとおばあさんが外で剣を使ってマジバトルしていたころ、マフィアがやってきました。マフィアは、超人的な力を持ったおじいさんとおばあさんと天才的な頭脳をもつたオタクがいるという噂を聞いてここにやってきました。マフィアはぜひ自分の組織に入れと言いました。でも、おじいさんとおばあさんは反対しました。マフィアは怒って、銃で撃ち殺そうとしました。おじいさんとおばあさんは銃弾をすべてかわして、剣で斬りかかりました。ですが、おじいさんとおばあさんは負けました。大好物のどら焼きを投げられたからです。おじいさんとおばあさんはすぐにどら焼きにかぶりつきました。マフィアは「ドラえもんか……」と言い、銃で撃ち殺しました。オタクは、銃を使ったゲームを1個もう1代わりにマフィアの仲間になりました。オタクはマフィアロボを作りました。そして世界を征服しようとした。ですがマフィアが誤って押した自爆スイッチにより、マフィアロボが作られている工場がすべて破壊しました。ですが、マフィアロボはまだ全部がやられたわけではありませんでした。』

月牙雷斗は本を棚に戻し、図書館を出た。そしてバイクに乗り、道路を走つていった。

ここ、ナイトシティは、夜景が綺麗で、賑やかである。住民も少なくない。だが、近頃、マフィアロボが発見されたという報告もある。

「そりいえば星美がお菓子買つてつて言つてたよな…」
雷斗は急に方向を変え、デパートに向かった。

後ろで車がぶつかる音がした。

デパートは主婦たちでいっぱいだった。新しい商品でも売り出されたのかなと思った。

お菓子がある所にきた。だが、雷斗は、思つた。

お菓子つて和菓子？洋菓子？スナック菓子？駄菓子？何？豚肉？

雷斗は走り、豚肉を取つた。ついでに牛肉も取つた。マグロも取つた。マグロは、自分の大好物だからだ。星美の金だがいいだろう。

若い女の叫び声が聞こえた。

お菓子ひとつでこの向の向の菓子がわからなことよ。 (後書き)

(裏話)

雷斗「星美に殴られるハマジ?」

作者「うん。」

雷斗「あいつ、ヤベエ怪力持つてんだよな…」

作者「どんぐらい?」

雷斗「岩に穴をあけます」

作者「…」

はい。わからないことだらけです。

雷斗は叫び声が聞こえたほうへ向かった。そこには若い美人の女レディがいた。

「どうしたんだ？」

「マフィアロボが……」

女の指差した先には、マシンガンをもつたマフィアロボ達がいた。（なぜいたかわからないが。）マフィアロボは黒いスースを着ていた、

「カネヲダセヨ！ ソウスレバタスケテヤラアーー！」

そう言いマシンガンを上空に撃つた。周りの人間は動搖したり泣き叫んだり悲鳴を上げた。

「報酬は三千でいいな」

「え？ ……は、はい…」

雷斗はマフィアロボの所へ歩いて行つた。

「ン？ ナンダテメヨハ？」

「お前たちをぶつ潰しに来たんですが。」

「ナンダトーー？」

「ムカツク、コロセー！」

「オウ！」

マフィアロボ達はマシンガンで撃つてきた。雷斗は物陰に隠れた。そしてどこからか、リボルバーを一丁取り出した。リボルバーはコルト・パイソンだった。（なぜかはわからないが。）

「行くか…」

雷斗は飛び出し、スライディングしながら、銃で撃つた。マフィアロボには効いているようだった。

だが、一発では倒れない。3～5発は必要だと、雷斗はそう思つた。

雷斗は、そこに転がっていたスケボー（なぜあつたかはわからな

いが。）に乗り、マフィアロボ達に向かつて突進しながら、銃を撃つた。

マフィアロボ達も負けずと撃つてきた。雷斗は横にジャンプした。スケボーは、一体のマフィアロボの足に当たった。マフィアロボの呻き声を聞きながら、雷斗はその隙に銃で撃つた。

マフィアロボが一体倒れた。爆発はしない。て言つか爆発したら怖い。

その時、足に何か当たった。足元にはM A S 49半自動小銃があつた。（なぜあつたかはこれまたわからないが。）

「一応使ってみるか……」

雷斗はコルト・パインソングを直してその銃を持ち、マフィアロボ達に突撃した。

ほんの数秒だった。

マフィアロボは全員倒れていた。

「……今爆発なんかするなよ」

雷斗はあの女に報酬と類にキスを貰い赤くなりながらバイクに乗つて走つた。

はい。わからないことだらけです。（後書き）

裏話

雷斗「…………あのついでにメールアドレス教えてもらえばよかつた。

作者「おれ持つてるよ。」

雷斗「ええ！？」

作者「だって作者だもん」

雷斗「むかつぐ…」

なんでも屋は、人殺しだつて引き受けた。

雷斗はハイケを止めた。

そしてある建物に入った

たたしあー」と

やつとせたあ

その声と共に女が走ってきた。

「うるせーなあ。星美。

「お菓子！－給料！」

「わかつたわかつた」

雷斗は袋を星美に渡した。

...
h
?

二二九

星三バク

「一
九
二
七

「あは（笑）」

星美は拳で壁に穴をあけていた。

一時間後

「
で、
給料」

雷斗が星美に何をされたかは読者にもわかると思うが

時間、殴り続けられた。

雷斗が給料を渡した瞬間。
気を失つてしまつた。

一
じせ
あわ

星美は出て行つた。

雷斗が入つて行つた建物は「なんでも屋」。星美はそこで働いている。と、いうか、ろくな仕事もせず、給料をもらつていて。

雷斗はそこに住んでいて、いつもゲームをしている。

翌朝、星美がやつてきた。星美はすぐソファーに座り、テレビを見ている。

雷斗はパソコンでゲームをしてくる。みんなダラダラ。

そこに、ひとつの女がやつてきた。

「あの～」

「ん？」

「依頼を頼みに来たんですけど～」

「何の依頼？」

雷斗はそういうと、星美をどかして（星美は寝ていた。起きていふときには必ず殴られる。）ソファーに座った。
「ある人を殺してもらひませんか？」

「へ？」

「なんでも屋なんでしょう？」

「…………まず聞こいつ。誰だ？」

「私の彼氏です。今、ツインマンションの五階に住んでいます。名前は直坂光輝なおさかひづるです」

「なぜこの依頼を？」

「よくぞ聞いてくれました。あいつは、私を殺そうとしています。

昨日も、私の部屋に入り、ナイフで殺そうとしました。その時は近くの人が助けてくれましたけど

「報酬は？」

「三億円です。サマージャ〇ボで当たった金です」「わかつた。引き受けよう」

依頼人、鹿野島麗子は公園で、ある男と待ち合わせをしていた。その男は明るく、麗子の新しい彼氏だった。前の彼氏、直坂光輝には秘密らしい。

新しい彼氏、東孝太郎は光輝とほとんど同じ体格で、高校の時、彼女にフラれたと言う。偶然、その人と麗子は顔がそっくりだった。雷斗は光輝が住む、ツインマンションへ向かった。時間は夜12時、仕事をするにはとてもやりやすかった。道路は車が少なく、とても静かだった。

雷斗はツインマンションの五階についた。依頼人からは、その手前から2番目の部屋だという。

雷斗はその部屋の窓から入ろうとした。窓の近くには階段があつたため難なく入れた。

そして雷斗が見たのは、血を流して倒れている青年と血の付いたナイフを持ったフードをかぶった男の姿だった。

なんでも屋は、人殺しだつて引き受けた。（後書き）

（裏話）

星美「ごめんやりすぎちゃった？」

雷斗「やりすぎだ。あざができたんで。」

作者「雷斗にはどんどん殴られてもううからね

雷斗「いつか死ぬぞ。俺。」

激闘して直撃され。 (前編)

いまさらキャラクター紹介

月牙雷斗

金髪の男、主人公、なんでも屋をやっている。武器は「ゴルト・パイソン。頭が悪い……かも知れない。

姿隠して声漏れや。

「クソツ！」

フードをかぶつた男はドアの鍵を開け、逃げたした。男は意外に足が速かつた。数分後、どこからパトカーのサイレンが聞こえた。

「とりあえず逃げよ！」…

雷斗は窓から階段に飛び移り、屋上でほかのマンションの屋上に飛び移つた。そして、そこからバイクを使って逃げようとした。だが、バイクの所には、すでに警官がいた。

「いたぞ！ あいつだ！」

警官達はなぜか雷斗を追つてきた。

「……なんで？ 殺したの俺じゃないよ？」

殺そうとしたのは事実だが。

雷斗は小さな家の屋根に上り、屋根と屋根を飛び越えながら逃げた。だが、6回目の飛び越えの時、誤つて家と家の隙間に落ちてしまつた。運よくフェンスはなかつた。

フェンスがあつたらケツにグサリだが。

雷斗はうまく警察から逃げられた。

雷斗はバイクの周りに警察がいか確認すると、そのまま走りだし、バイクに乗つた。

雷斗がバイクで道路を走つていると後ろにパトカーがやつってきた。

「待て～！ ル○～ン～！」と、言ひそつた予感だった。

その時、パトカーの窓から何かが出てきた。

「…………拳銃だ」

そして警察は撃つてきた。

「殺す気だろおおおおおおおおおおおおおお……！」

雷斗はコルト・パイソンを取り出した。

「こうなつたら仕方がない！！」

雷斗は後ろを振り向き、撃つた。だがパトカーの装甲には効かなかつた。

そして警察も撃つてきた。

はい。カーチェイスです。

10分後、弾が切れたので、雷斗はM A S 半自動小銃を取り出し、撃つた。パトカーのタイヤに弾が当たり、パトカーは遠ざかって行つた。

「最初つからこれ使えばよかつた」

雷斗はなんでも屋に帰つてきた。中には、依頼人、鹿野島麗子とその新しい彼氏、東孝太郎がいた。

「成功したんですか！！」

麗子はそう聞いてきた。

雷斗は「誰かが先に殺した」などと言えない。それに、それを言うと報酬ももらえない可能性があるので「はい」と、一言だけいった。孝太郎は、大きなため息をついて、

「よかつたあ」

と言つた。その時、雷斗はある事に気づいた。

直坂光輝を殺した犯人と声が同じだ。

雷斗は孝太郎の腰を見た。なんとナイフが鞘に入れられて装着されている！

孝太郎は雷斗が自分の腰を見ていることに気づき、「早く帰ろっ」と言った。

雷斗に麗子は報酬（三億円）を渡し、去つて行つた。孝太郎の不気味な笑顔が見えた。

一人が出て行つたあと、雷斗は星美に話しかけた。

「すまないが、あの二人を追つてくれないか？」

「え？ めんどくさい？」

「あの東孝太郎というやつが俺が殺そうとした男を殺した奴かもしれないんだ。もしかしたらあの依頼人も殺されるかもしれない。」

「……まあ……暇つぶしにはなるかもね」

星美は出て行つた。雷斗はふと思つた。

星美が俺の言つことを聞くなんて普通あり得ないことじゃないか？ 印象が最近ひよしたのか？

麗子と孝太郎は路地裏を歩いていた。一人は公園についた。

「ねえ、なんでこんなところに連れてきたの？」

「なあ、麗子、俺が高校生の時、一人の女にフラれたことは知つてるよな？」

「う…うん」

「その女とな、俺は付き合つてたんだ」

「……」

「だが、そいつはほかの男と付き合つて、俺のことなんか遊び相手としか思つていなかつたんだ。そして、その事を俺に話して「反省しておもう別れよう」と言つた時、俺はどうしたと思う？」

「…わからない」

すると、男は間を空け、言った。

「殺したんだ」

「えつ…」

「俺はそいつを殺した。ナイフでな。だがあの無能の警察は俺を捕まえられなかつた。そして時が経ち今ここにいる」

男は笑つた。

「お前はその殺した奴と似てるんだ。それが妙にイライラするんだ。だからさあ、お前を殺させてくれないかああーー！」

男はそう言いナイフを取り出した。その時、後ろから銃声がした。地面に穴があいている。

銃を撃つたのは星美だつた。星美の持つてゐる銃はブレン・テンだつた。

「あいつの言つてたことは本当だつたんだな」

「クソッ、なんでも屋の奴らか！」

「お前がどう反抗しても私には勝てないよ」

「どうかなあ…おい！おめえらーー！」

その時、どこからかマフィアロボが現れた。

「つーなんでマフィアロボがーー！」

「こーー！」

「いやー！」

麗子は連れ去られていつてしまつた。

激闘して直撃され。 (後書き)

雷斗「やつとキャラクター紹介だな。」

作者「はい。次は星美です。」

星美「読者に悪い印象与えないでね。」

作者「は・・・はい。」

雷斗「お前には悪い印象しかないと思つんだけど。」

力チャヤ…ズダダダダダダダン!!

雷斗はハチの巣にされたとわ

空手を習つてた人？S空手、柔道、合気道を習つてた人（前書き）

キヤラクター紹介

くまだうぼしみ
熊堂星美

青い色の髪をしている女。ショートヘア。なんでも屋で働いている。
美人。優しい。仕事熱心。

空手を習つてた人？S空手、柔道、合気道を習つてた人

星美はマフィアロボ達に苦戦していた。孝太郎と麗子はもういない。

力チツ カチツ

弾切れ。星美の銃にはもう弾がない。

もう終わりか

星美はそう思つていた。マフィアロボは星美に銃を向けた。

ダン！！

撃たれたのは星美ではなく、マフィアロボだつた。

ダン！…ダン！…ダン！…ダン！…ダン！…

マフィアロボ達を次々と銃弾が襲う。
銃を撃つたのは雷斗だつた。

「……遅すぎだよ」

「すまないな。星美。やっぱ当たつてたか。ほら、弾だ」
雷斗はポケットから弾を取り出し、星美に渡した。

「……依頼人はあいつに連れ出された。ここは私がやるから早く行
け！」

「わかった。気をつけろよ」

「言わねなくてもわかってる！…」

星美はそう言いながらマフィアロボを撃つ。

雷斗は孝太郎が逃げた方向へ走った。

「あー！早く行ナ！」

—
h
—
!

L

麗子は口をガムテープで貼られ、手は縄で縛られていた。

ପ୍ରକାଶକ

「つ！ 誰だ！！

もちそん 雷斗たん

アーティストとして死んでしまった。」

考 万郎は持っていた鉢 テサ――リ――クリで雷ミを撃た
その時には雷斗はいなかつた。
「つ!どこいつた!!--でてこい!!--」

「だぜ！！」

孝太郎が後ろを振り向くとそこには雷斗がいた。雷斗が銃を構え、孝太郎の足に撃とうとした。

力チツ 力チツ

「あれ？」

- 1 -

ああああああああああ！！

孝太郎は銃をはじき、雷斗を蹴り飛ばした。

「俺はなあ、空手を習つてたんだよ。」

「ぐ……」

孝太郎は銃をホルスターにしました。

「さて。こつからは肉弾戦と行こうじやないか」

雷斗は立ちあがつた。

「…………いやだ」

雷斗は自分の銃へ走りだした。

「いやー空氣読めよーーー」これ小説だろーー？」

それでも雷斗は走る。

「くそつ！」

孝太郎は銃を取り出した、その時にはもう雷斗は銃を持っていた。

「く……」

その時、誰かが孝太郎を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばしたのは、なんと麗子だった。

「こいつ見えても、空手、柔道、合氣道を習つてたんですよ？」

その後ろには星美がいた。麗子を縛つていた縄をほどいたらしく。

「ぐ……このおおおおおおおおおおーーー」

孝太郎は殴りかかった。だが、すぐに受け止められ、逆に腹に殴られた。

「まだだ！！」

孝太郎は蹴りつけた。だがまたしても受け止められ、そのまま投げられた。

孝太郎は立ち上がりつけた。その隙に麗子は回し蹴りをした。

孝太郎は氣絶してしまった。

数時間後、警察署の前に、倒れている誰かがいた。扉から警官が出てきた。警官は誰かが倒れていることに気づいた。

「お、おい！ どうしたんだ！！」

その誰かには、背中に何か張られていた。貼られていたのは紙だつた。紙に何か書かれていた。

「こいつは、東孝太郎。直坂光輝を殺した。今すぐ逮捕しろ」

空手を習つてた人？S空手、柔道、合気道を習つてた人（後書き）

星美「作者、ありがとね。」

作者（みなさん。「めんなさい。」）「うするしかなかつたんです。」

雷斗「熊堂星美、青い髪をしている女。ショートヘア。なんでも屋で働いているがよく仕事をやめる。怪力。凶暴。熊みたいに怖い。とりあえずやばい。」

星美「なんだと……もつこつかいハチの巣にしてやるつか……」

雷斗「ごめんなさい……」

二十九

「」と書いた事ですか？」

麗子は驚いていた。麗子がナイフで殺されそうになつたとき、助けたのはあの光輝で、殺そうとしたのは孝太郎だからだ。すべて、殺そうとしたのはあの孝太郎だったのだ。

警察官はある物を麗子に渡した。

これは、あなたに渡したほうからしてしまふ

それは指輪だった。どうやら光輝は麗子は一口ホーフをじょんとしていたらしい。

「では、これで

敬察は麗子の家を出て行った

依頼が全然来ねえええええええええええええ！」

「いや、なんでも屋。もうあれが

「…………（もつすぐで財布が空っぽだ

係する出費で（（

。ドアが開いた。開いたのは学校の制服を着た少女。

「レジがなんでも屋ですか？」

ははし

「キタアアアアアアアアアアアア

アア！！！」

「…………あの~」

「あ、…………すみません。ここに座つてください。」

ソファーに男は座つたが、もう一つのソファーは星美が独占しているので、椅子を持ってきて座つた。

「で。依頼つて?」

「はい。フェアリー・マウンテンに行きたいんですが、妖精がいて危険なため、護衛をお願いしたいのです」

「ふーん。フェアリー・マウンテンって何?」

「え……知らないんですか?」

「うん。知らない」

「…………この街の東にある山です」

「ふーん。で、妖精つて何?」

「妖精とはいわゆるゾンビです」

「え……」

「そいつに噛みつかれるとその仲間になります」

「でも、ゾンビなんかこの街にいないぞ?」

「いや、ゾンビの活動範囲はその山だけなんです」

「それから、ゾンビは銃は効きません」

「ええ!いや、そんな依頼無理でしちゃう……」

「そうですか?」

男は立ち上がつた。

「そういうえば、報酬は?」

「3億です。サマージャ〇ボで当たつた金です」

男はそう言いながら出て行つた。雷斗はすぐに男を捕まえて、ソファーに座らせ、言つた。

「引き受けます」

「そうですか!では、明日の毎一時に、ここに来ますので
男は出て行つた。

「言つとくけど私は行かないからね」

「わかってる。何か近接武器がここにあつたっけ」

「物置に刀があるよ

「どうも」

雷斗はこの建物の裏にある物置に向かった。物置の中は暗く蜘蛛の巣が張っていた。雷斗はその中から、刀を取り出した。

いわゆるゾンビです。（後書き）

雷斗「次はゾンビか」

作者「はい。結構手強いように設定しています。」

星美「噛みつかれたらゾンビになるか……よくあるパターンね。」

作者「ゾンビって言われたら、そんな特徴しか思いつかねえんだよ

！」

雷斗「作者の独創力が死にました（笑）」

聖き声をしないソンヒツて逆に怖い。

「すいません。依頼なんですが…」

あの研究員らしき男がやつてきた。

「おう。待つてたぜ。そんじゃ行きますか」

「はい」

雷斗は刀を持ち、研究員らしき男について行つた。そして十分後、奇妙な形をした山へ着いた。山は中心に穴があいていて、木が所々なくなつていて。

「あれは、妖精が喰つた後なんですよ」

「なつ…」

雷斗は固まつた。

「さあ、行きましょう。仲間たちが来てています」

雷斗たちはそこにあつた小屋へ行くと中には精密な機械を背中に背負つている研究員らしき男たちがいた。

「よう。聖樹^{しょうき}。待ちくたびれたぞ。今日は重要な研究をするんだから」

「すまない。ほら、護衛を引き受けてくれた人だ」

「おう。誰だか知らんが頼むぞ」

「あ、ああ」

そして研究員達はフェアリーマウンテンに登ることになった。

辺りは静かだった。聖樹が言った。

「気を付けてくださいよ、すぐそばにいるかもしれないですから」
雷斗はよくゾンビは呻き声をあげることを知っていたので、（ゲームでだが。）まだ声が聞こえないうちは大丈夫だと安心していた。
だが山に入つて十分後。

雷斗が後ろを振り返ると5m先には、白目をむいた人（？）が歩いていた。

「まさか。あいつか？」

「.....迷走の魔術師がお一人」

研究員達は一目散に逃げ出してしまった。

「呻き声をしないゾンビって逆に怖い」

妖精はその声に気づき声をしたほうへ走つて行つた。どうやら視力はないようだ。

また研究員たちの叫びが聞こえた。雷斗は刀で妖精たちを切り倒しながら叫びが聞こえたほうへ走った。切り倒された妖精たちはまた起き上がっていた。

研究員たちのもとへ行くと、そこには無数の妖精たちに囲まれて

「やつらの弱点は頭です！」

雷斗は刀を持ち妖精たちに斬りかかった。妖精たちを斬っていると、肩を妖精につかまれた。妖精が雷斗の喉元に噛みつこうとする。雷斗は素早く銃を取り出し妖精の頭を撃つた。妖精はよろめいた。銃だけでは倒せないがよろめかせることはできた。雷斗はその隙にその妖精を斬った。

撃つて斬つて撃つて斬つて撃つて斬つて。そうするうちに妖精たちは倒れて行つた。

最後の妖精が倒れた。研究員達は全員無事だつた。研究員たちは「企業秘密だ。」と言つて、雷斗に研究を見せないようにしていた。

そして研究が終わった。研究員達は機械を背負い、ふもとへと歩いて行く。その時、銃声が鳴った。

研究員達の目的

雷斗は銃声の鳴ったほうへ走った。研究員達はふもとまでもうすぐなので大丈夫だろ？。

そして雷斗は妖精に喰われよ？としている星美を見つけた。

雷斗はすぐさま妖精を斬った。

「…大丈夫か？」

「刀を持つていったのはこうこうことだつたんだな……」

そこで倒れていた妖精には沢山の銃弾であけられた穴が開いていた。

「…で、なんでここに？」

「あの研究員達が何のために研究をしていたかわかるか？」

「…いや。」

「…マフィアロボを剣も銃も効かないやつらにするためだよ。」

「なんだつて！？」

「あたしは、そう父さんからそつ聞いたんだ。そして、あの研究員達の目的は…」

「この街を…破壊すること。」

「…………！」

「なぜかは知らんが、そつじよ？としているらしく。」

「とりあえず、帰るぞ。」

雷斗たちがなんでも屋に帰ると、そこには机に置かれた報酬と椅子に座っている髪を生やしたマツチヨのおっさんと20代の男がいた。

「……つ！ あいつらは！ ？」

「……わからない。」

「つたぐ。お前一人で行くからだ！！」

このおつさんかなめひるとは星美の父、源幸げんこうである。源幸はマフィアであり源幸の部下、要人かなめひると大翔だいじょうは星美の友達である。

「……大翔！ やつらはどこだ！！」

「……ウェポンビルにいるよ。」

そこにいた男が言った。この男が大翔である。

「よし！！ それじゃあウェポンビルに行くぞ！！」

「わかった。」

大翔は持っていたノートパソコンを閉じ、ドアの所へ行つた。腰にはホルスターに入れられた拳銃のトカレフトトカレフTT 33があつた。
「おい！！ 大翔！ さつそくあいつらをウェポンビルに向かわせるよう指示しろ！！ 僕は先に行く！！」

「わかった。」

源幸はなんでも屋を飛び出し、大翔はケータイを取り出した。

「……健人か？」

『……大翔か。いつたいどうしたんだ？』

「みんなをウェポンビルに向かわせろ。ボスの指示だ。」

『わかつた。すぐにむかわせる。』

大翔はケータイをポケットに入れ、なんでも屋を出ようとした。

「大翔！！」

「……なんだ。」

「あたしも行く。」

「好きにしろ。」

「俺は行かないぜ。タダ働きは嫌だからな。」

「……あつそ。」

星美と大翔は出て行つた。

研究員達の目的（後書き）

（裏話）

雷斗「…あれ？まだこの「一ナーヤッてるんだ…」

作者「はいやつてます。」

雷斗「7話目はやつてなかつたの！」…

作者「それはぼくのミスです。」

雷斗「ふーん。」

星美「この物語もなんかシリアスになつてきたような。」

作者「はい。その通りです。」

雷斗「それにしては、次話は俺は登場しないことになつてるじゃないか。」

作者「雷斗には休んでもらいます。」

星美「あとはあたしが主人公ね」

雷斗「ええ！？」

襲撃3・1（前書き）

（キャラクター紹介）
熊堂源幸

茶色い髪をしているマツチヨなおっさん。星美の父。妻を亡くしている。マフィア、赤い狼、のボス。最近邪魔なマフィアロボを全員ぶつ潰そうとしている。

ウェポンビルは会社員が帰宅するころだった。ここを襲うにはちょうどいい時間だろう。星美はそう思いながら物陰に隠れていた。そばにいた大翔は電話をかけた。

「ボス、準備はいいですか」

『その前に星美に代われ』

大翔は星美にケータイを渡した。

「何？」

『バカヤロー……………』

その声はあたりを見回していた大翔にまで聞こえた。

『な、何！？』

『なんでお前かくるんだよ！…』

『わたしだけじつとしているなんてやだ！』

『お前は俺の宝物なんだぞ！…』

『宝物は暴れたらいけないわけ！？』

『……とりあえず、死ぬなよ。大翔に代われ』

星美はケータイを大翔に渡した。

「なんですか？ボス」

『星美に何かあつたら殺すぞ』

『……わかりました。で、何時に襲撃します？』

『10時だ。健人たちにもそう知らせてある。』

『わかりました。』

大翔は電話を切った。今は9時49分。襲撃まで約10分。大翔はじつとウェポンビルを見続けていた。後ろには星美と仲間6人。ほかにもボスたち13人が襲撃の準備をしている。襲撃まであと5分。その時、ドアが開いた。

中から出てきたのはマフィアロボ達だった。9体いる。

「な、なんでこんな時に！」

ケータイが鳴った。大翔は電話に出た。

『大翔も見たな。マフィアロボがいる』

「はい』

『なぜだか知らんが、ステルス作戦で行くぞ』

「了解』

『俺たちが左の3体を潰す。真ん中の二体は健人たちに任せる。お前たちは

『右の3体』

『そうだ。なら、なにかあつたら電話で報告しろ。作戦開始』
電話が切れた。大翔は星美たちにその事を話し、路地裏に向かった。マフィアロボはウェポンビルの近くをウロウロしている。まずは路地裏に隠れ、マフィアロボが路地裏に近づいたところを攻撃する。そう 大翔たちは決めていた。マフィアロボがこちらに近づいた時ケータイが鳴った。マフィアロボが気付いた。

「ン？』

大翔はそれに気づき、マフィアロボを投げ飛ばし、頭を撃った。マフィアロボが動かなくなつた。

大翔は電話に出た。健人からだつた。

『大翔！ 気をつける！ トランプだ！ あいつらにはライフマークが装着されている！』

「なに！？』

『まさか…』

「ああ』

『このことはボスに知らせる。そこから逃げる！』

ライフマークとは、仲間の状態を把握できる装置だ。仲間に異常が起こつた場合、すぐにそこに向かうことができる。

『みんな逃げる！』

大翔達は奥に走り出した。

『ダレカイルゾ！』

どうやら気付かれたらしい。大翔は銃を取り出し後方に撃つた。

大翔たちを銃弾が襲う。大翔達は何とか物陰に隠れた。どうやら

仲間一人が撃たれたらしい。

「この傷ならまだ大丈夫だ。とはいって、このまま進むのは危険だ。

星美とあと一人待機してくれ。」

「やだね！わたしもいく！」

「…しかたない。俺が先に行く。お前はバックアップを頼む。」

その時、ケータイが鳴つた。

『大翔、大丈夫か？』

源幸からだ。

「はい大丈夫です。ですが1人負傷しました。今は俺と星美と他の奴ら4人だけです」

『あと一人は？』

『負傷した奴と共に待機しています。』

『わかった。マフィアロボ達は全員ぶつ潰した。だが、まさかライマークが取り付けられてたとはな』

『あれはたしか、未売品のはずです。』

『どうやつて手に入れたかは予想できる。おそらく工場から持ち出したのだろう。今、ウェポンビルの入り口で待機している。お前たちも早く来い』

『了解』

大翔達は路地裏を通り抜け、ウェポンビルの入り口に着いた。入口には源幸や健人達がいた。

襲撃3・1（後書き）

裏話

雷斗「久しぶりにキヤラクター紹介だな。」

作者「はい。そんなにキヤラクター出てきてませんでしたので。」

星美「鹿野島麗子とかいたじやん。」

作者「いちいち書いたらめんどくせーじやん。」

久々に鹿野島麗子登場。

作者「ええー？」

ボカ！ドカ！ゴキ！ボリボリボリボリ！！ドガアアアアアアアアン
！！！

終（作者の命が）

襲撃3 - 2（前書き）

要人 大翔

かなめひろと

マフィアの一員。熊堂源幸の部下。茶髪。武器はトカレフTT - 3

3。熊堂星美と友達。

バアアン！！

源幸は蹴りでドアを開けた。中は誰もいない。会社員は全員帰つたようだ。

「星美と大翔は1階！健人たちは2階！俺たちは3階を探索する！終わつた奴らはもつと上の階を探索しろ！」

源幸や健人達は上の階へ行つた。

「コツコツコツコツ……

「ボス。あの二人に任せていいいんですか？」

「ああ、大丈夫だ。いざとなれば俺が助けに行く」

星美はカウンター、大翔は奥の作業室を探索していた。

「いない。大翔、そつちは？」

「こっちもだ。 つ！」

ガタン！！

「え
」

作業室では研究員と大翔が取つ組み合いをしていた。なんと研究員はロツカーに隠れていたのである。さつきの音はロツカーから研究員が飛び出した音である。

研究員と大翔はお互いに服を掴み合い転がっていた。大翔は服を掴みながら研究員の顎を蹴つた。そして研究員が服を離したその隙に、大翔は立ち上がり研究員を起き上がらせ、ロツカーへ叩きつけた。

「いえ！リーダーはどこだ！」

「リーダー？そんな奴いないぜ」

「ふざけるな！」

大翔は研究員を殴つた。だが、研究員は殴られながらも膝蹴りを大翔に喰らわせ、内側のポケットからナイフを取り出した。
「死ね！――」

「動くな！――」

研究員は声がしたほうへ顔を向けた。星美だった。

「ナイフを置け！――」

研究員はナイフを置いた。次に見えたのは拳銃を持つている研究員だった。

「つ！しまつた！」

星美は机に隠れた。机に置かれたパソコンを銃弾が襲う。

研究員は銃を大翔に向けた。大翔は前転で机に隠れる。そしてトカレフト TT 33を机から突き出す。

ダンダンダンダンダン！――

銃弾は研究員の足に当たり、研究員は倒れた。呻いている。大翔はマガジンを変え、研究員に銃を構えた。

パシュ……

「……殺したの？」

星美が歩み寄りながら言った。

「いや、眠らせただけだ。」

大翔は研究員が何か持つてないか調べた。研究員が持っていたのは名前が書かれているカードだけだった。

「コツコツコツコツ……

「ん？」

「力チャ……

「動くな」

星美と大翔の後頭部には銃口が押し付けられていた。

「やっぱ、桂太は頭が悪いなあ。ロツカーに隠れるなんてよ。」

「そうだよなあ。でも、桂太はそれなりにがんばったなあ。」

「だが、名前も見られちゃしちゃうがねえなあ。」

声からして、星美と大翔の後ろには3人ほど男が居る。

その時、二人の間から銃が飛び出した。

「殺そう」

「ダン！」

二人の目の前にいた研究員の頭には穴が開いていた。床にある血の水溜りがどんどん広がっていく。

「やべえ。服が汚れちまつた」

「ふざけるな。お前たち、何しにきた」

「…………」

「おい。聞いてんのか？」

星美と大翔はこそそそ話をしていた。

「ちつ……」

研究員はトリガーを引こうとした。

ガシヤアアアアアアアアアアアアアアンー！

「つーーー！」

突然、窓が割れた。

「…………よう」

雷斗だった。

「雷斗！なんでここに！？タダ働きは嫌だと言つたろーーー！」

「それがね……お前の親父から頼まれたんだよ……報酬200万円で

な」

「お前！いつたい誰だ！」

「お前たちをぶつ潰しに来たんですが」

「ふざけんな！」

研究員は銃を雷斗に向けた。雷斗は素早く机に隠れた。

「殺せ殺せ殺せーーー！」

研究員達は銃を雷斗に向けた。星美と大翔はその隙に研究員達を蹴つた。

「ぐおつーーーちいつーーー！」

研究員は蹴られながらも一人を撃つた。星美は攻撃を防いだが、大翔の腕は赤かつた。

「大翔ーーー！」

「……大丈夫、かすつただけだ。」

「くそつーーー！」

星美は走りながら銃で研究員達を撃つた。雷斗を撃つていた研究員が倒れる。星美は弾がなくなるとスライディングし、物陰に隠れ

ながらリロードをする。

「おら！！」

雷斗が飛び出し研究員の一人にラリアットを喰らわせるその隙に頭にコルト・パインソングを向ける。

雷斗は交互に研究員を見ていた。

「ゲームオーバーだ」

「まだだ！」

研究員はナイフを取り出した。

「コンテニユーは無理だな」

そういうた瞬間に研究員は肩を撃たれていた。

「これは強制だ」

「ぐ……」

「終わつたぞ」

大翔と星美は少しづつ歩いてきた。大翔が麻酔弾を撃つた。

パシュッパシュッ……

研究員達は眠りについた。研究員達と大翔達を残し、雷斗は上の階へと昇つて行つた。

2階、倒れている研究員以外誰もいない。

3階、倒れている研究員以外誰もいない。

4階、5階もそつだつた。

そして、6階。そこには傷つき倒れているマフィア達がいた。

「なつ……」

そして、奥の黒板に立っているのは研究員だった。

「お前は……聖樹か」

研究員はその声に気づき、振り返った。

「ああ、これは……なんでも屋の人ですか。あなたもいたんですね」

「ぐ……くそつ……強いぞ……」

雷斗の足元には血を流し倒れている源幸、健人がいた。

「…………なぜこんなことをするんだ?」

「なぜって? 邪魔ですからね。」

「…………おい。ボス」

「…………生かすか殺すか。ビットで決める?」

「どっちでもいい」

「なら……殺す」

カチャ……ダンダンダンダン! -!

雷斗は二丁のリボルバーで聖樹を撃つた。だが、瞬時に机を倒し防いだ。次に出てきたのは、機関銃だった。

「なっ……」

ダダダダダダダダダダダダダダダン! -!

机にあつたものを銃弾が襲う。銃弾の雨が止んだあとにはパソコンや資料を入れる棚はハチの巣になっていた。

「これほどの大人数がやられた原因はこれだったのか……攻撃もできない。装弾の時を待つか。……今だ！！」

研究員は雷斗が飛び出したのを見て笑った。

「甘いな」

力チャヤ……

「しまつた！－！」

ダン！－

撃たれたのは雷斗ではなく

聖樹だった。

「K様…………？」

聖樹の後ろにはフードを被つた謎の男がいた。

「…………用済みだ」

聖樹は

死んだ。

襲撃3 - 2（後書き）

裏話

雷斗「なんだ、俺出てきたジャン！」

星美「…これはどういうことなのかな？」

作者「いや、物語的には」つ言つのがいいかな…と。」
星美「雷斗の件はともかく、なんで最後は登場しないんだよーーー！」

作者「それは…………」

星美「もういいや」（笑）

あとは「想像で

「聖劍？」

聖樹はもう言葉を発しない。

「かうじよつせんにあらわす」

拳銃、ゴルト・アナコンダ。

説の男は窓に向って三発撃つた。窓は壊れ、地面はガラガラが陥り、注ぐ。

シナリオ

謎の男は駆走をして窓から飛び出した

な、！正気なあい」^イ」^シ」

「二二〇を取る」

源幸は立ち上がつて銃らしきものを渡した。

「イヤー、シミツトだ!!!」そい一を便にて升ひ移れ!!!あれを渡し

「あら、アリス君がお出でになつたのですね。」

雷汁はワイヤーショットを構え、トリガーを引いた。すると何かが一瞬にして飛び出し、向こうにあるベルの屋上のフェンスに引っ

「ひやつぼつーーーこれはこれで楽しいーーー」

「...」

雷斗の腹がフェンスに強打した。

「飛び移り成功……でもいてえ……」

謎の男が振り返った。

「ふ……面白いものを持つていますねえ」

「悪いが仕事なんだ。その変な力プセルを貰つぜ。それがあのおつさんのおつしょがつてた物らしいからな」

「なら、奪つて見せなさい」

「…………んじや、遠慮なく」

雷斗は走りだした。コルト・パイソンを両手に持つて。

謎の男はコルト・アナコンダを構えた。そして撃つた時には、雷斗は既にいなかつた。

雷斗は飛んで、謎の男の頭上を飛び越していたのだ。そして謎の男の後ろに立ち、振り返り銃を向けた。

だが、そこに見えたのはもう一つのコルト・アナコンダがこちらを向いていることだつた。

ズダーンー！

「なつ……」

「君を殺すのは惜しい。試作品ですが、傷薬の注射をうつておきましょう。」

謎の男は注射器を取り出し、雷斗の腕に注射した。

「それでは、さよなら。」

謎の男はビルを飛び移つて去つて行つた。雷斗は次第に瞬きの時間が長くなり、そして、目を開けなくなつた。

おい おい！！

「う…………」

「やつと起きたかバカヤロ――――！」

雷斗は頭に痛みを感じた。そして、最初に見たのは星美だった。「心配したんだぞ！まつたく！」

「…………俺、撃たれたんじや？」

「それが、服に穴は開いてるけど傷がないんだ。」

「そりゃ…………」

横には大翔がいた。

「あのカプセルは？」

「あ、ああ。これか？」

雷斗はポケットからあのカプセルをだした。雷斗は謎の男の後ろに立つた時すでにカプセルを盗んでいたのだ。
「よかつた。なら、ボスに知らせてきます。」

大翔は階段を下りて行つた。

「ほら！立て！」

「わかつてるよ。」

星美は雷斗に肩を貸して階段を下りて行つた。

源幸は救急隊員の担架で運ばれていた。健人は松葉杖で体を支えている。もちろん救急隊員に自分たちがマフィアと言つことは秘密だ。

「ボス、大丈夫ですか？」

「へへ……3ヶ月もすれば大丈夫だ。それより、あれは？」

「ボス――――――――――！」

「大翔！――あのカプセルは？」

「大丈夫です。」

「なら、お前が持つていってくれ。」

「はい。…………そういえば、雷斗への報酬は？」

「は？ そんなこと聞いていないが。」

「え……あ、いいですいいです。」

「お、おう。」

源幸は救急車に乗せられた。ほかの仲間たちも無事だった。

「……………あの人、嘘をついてたんだな……………」

大翔が左を見ると、そこには星美と雷斗が歩いていた。

「ほら！ さつさと歩け！」

「俺ケガ人だぞ！！」

「ケガなんてなんにもねえじやねえかボケ！！」

ガスツ！！

「殴んなよ！ いてえだろうが！ ！」

「うるせえ！！」

「ふつ。 の人たち、いいコンビですね」

やつと……終わった……

人は失つてからその物の大切さを知る。

ここは謎の部屋。そこに人影が三つ。

「つたく！何故お前があれを盗られるのだ！」

「すいません 様。すぐに取り返します」

「もういい。バルケイドに任せる。お前は下がれ」

「はつ」

「なら、バルケイド、頼むぞ」

「はつ」

二つの人影が部屋を去った。

「今こそ、先祖の恨みを晴らす時だ…」

あのウェポンビルの一件から三日。

大翔と少数のマフィア達はアジトで戦っていた。

「何だあいつは…！」

「知らねーよ！」

「だけどこのままじゃやば

「

ズドオオオオオオン！！

マフィア達に爆風が襲いかかる。マフィア達の眼にはフードをかぶつた謎の男が映っていた。だが、その両手にはグレネードランチャーが握られていた。

ダネルMG』

「くそ！またやられた！！」

大翔はリロードをしていた。

「なぜあいつに銃が効かないんだ！！防弾ベストでもつけてるのか！？」

「とりあえず、大翔は逃げる！あいつはこのカプセルを狙ってる！」

「で、でも……」

「いいから逃げる！！早く！！」

大翔はグレネード弾によつてあけられた穴から脱出した

銃声が鳴り終わつたあとには無残にもマフィア達の死体が転がつていた。

ドタン！！

「二人ともいるか！！」

「何？大翔」

「俺たちのアジトが襲われてるんだ！！助けてくれ……」

「なんで？」

「なんでって……」

「俺はタダ働きは嫌だと言つたはずだぞ」

「ボスからは何も言つてなかつたぞ！！」

「げ。ばれてた」

「頼む！星美！！」

「わかつたよ。行くよ。雷斗は？」

「行かないに決まつて つ！危ない！！」

雷斗は星美を突き飛ばした。ドアの向こうから何かが飛んできた。

ズドオオオオオオオオオオオオオオンーー！

壁に穴が開き、中を爆風が襲つた。そして、雷斗が見たのはパソコンがばらばらになつてゐる姿だつた。

「あ、あいつだ！」

大翔がドアの方を指差すと、そこにはあの謎の男がいた。

「てのえ」

「ウーラー！」

雷斗はいつの間にかコルト・バイソンを持っていた。そして男へ走りだした。

((そつち! ?))

雷斗は銃を向けた。謎の男は電柱に飛び移り、グレネードランチャーを構えた。

ノーベル賞

グレネード弾が飛んでくる。

「弾速が遅いんだよ！」

雷斗はグレネード弾を次々と避けた。

雷斗が撃つた。

だが謎の男はびくともしなかつた。

「雷斗！あいつは銃が効かない！…」

「なら刀を持つてこい！倉庫にある…」

雷斗はそこにあった車に乗り、家の屋根に飛び移る。

「とりあえずあいつをあそこから引きずりおろしてやる…」

雷斗は助走をつけ、飛んだ。

一秒、グレネード弾が飛んできた。

一秒、雷斗は銃を撃ち、グレネード弾と相殺させた。

三秒、爆風の中を通り、電柱へ向かっていく。

だが、雷斗は謎の男にかかと落としされ、地面に叩きつけられた。
謎の男はグレネードランチャーを上に向けた。

「地獄の雨とでも呼びましょうか」

ズドンズドンズドンズドンズドンズドン……

グレネード弾が降つてくる。

「なつ…」

雷斗は爆風に襲われた。そして一つのグレネード弾がなんでも屋へ向かつて行つた。

ドオオオオオオオオン！！

雷斗はなんとか生きながらえていた。だがなんでも屋が崩壊してしまった。

「…………てめえ」

「雷斗！刀だ！」

大翔は刀を投げた。

パ
シ
ツ

「何が何でもめえをぶつ潰す」

雷斗は刀を鞘から抜き、構えた。謎の男はまた、グレネードランチャーを上に向けた。

ズドンズドンズドンズドンズドンズドンズドン！――

また地獄の雨が降ってきた。

雷斗は跳んで、電線を斬つた。

バチツ

そして、垂れた電線を持ち、壁に向かって走った。そりらじゅうにあつた廃車やドラム缶はもう吹き飛んでいた。

ズバアー！！

謎の男は落ちて行つた。だが手を下に向け受け身をした。

そしてグレネードランチャーを捨てた。

「やはり銃器は苦手ですか」

その時、雷斗は謎の男に肘打ちを喰らっていた。

「「」はつ…」

「雷斗！…！」

「そういうえ、ばこの人たちもいましたね」

「てめえ…」

星美はどこからか大量の手榴弾を出した。

「死ねつ！…！」

星美はすべての手榴弾のピンを抜き投げた。辺りを爆音と爆風が襲う。

だが謎の男は無傷だった。

「なにつ…！」

「ドス…！」

大翔と星美は倒れた。謎の男がカプセルを奪った。

「任務完了」

謎の男は去つて行つた

今日は風がよく吹いている。

ある夜、小学4年生である泰雅は7時に始まるアニメを見ていた。

「母さんー風田は9時にしていい? 今日はスペシャルだからー。」「はいはい。わかりました」

「やつたー!」

母は台所で皿洗いをしており、その横には、新聞を読んでいる父が居る。

「父さん、今日は仕事どうだったの?」

「ああ、大丈夫。リストラなんてされないさ」

「そりやそうだよね」

「母さん。チャンネル変えたでしょ」

「ん? 何が?」

「だつてアニメが突然終わっちゃったんだもん」「今日はスペシャルじゃなかつたんじやない?」「でもまだ三十分になつてないよ」

「リモコンは?」

「あ、あつた」

「なんだ。すぐそばじゃない」

テレビには録が映つてあつた。

『我々は録神団』

「変な番組ね」

母はやつ言つてリモコンのボタンを押した。画面が暗くなつた。

次に映つたのはまた録。

「あれ? チャンネルが一緒だつたかしら」

母はもう一度ボタンを押した。だが、どのボタンでも映つたのは

銃だった。

『 チャンネルを変えようとした者。これは全局で放送されている』

『 母は黙つたままだつた。

『 我々はこれから世界中での狩り取りを行う。選ばれた者は私の下で下僕として生活できる。だが、選ばれる価値のない者は

』

『 殺す』

『 さあ、逃げるがいい』

そして画面が元のアニメに変わつた。

「なんだつたんだろうね。母さん」

「さあ…ほつときましょ」

母は再び台所へ戻つた。

ズドオオオオオオオオオン!!

そして消し飛んだ。父と一緒に。

「父さん? 母さん?」

そして泰雅が見たのは血を流し倒れている人間たちとマフィアロボ達だった。マフィアロボの一人が銃を向けた。

ズダーン!!

三ヶ月後。大勢の住民たちが廃墟と化したビルでうずくまつっていた。「もうこの世は終わりだ。」「本当に生き延びられるのか?」そんな声が椅子に座っていた雷斗には聞こえていた。星美は頭を抱え、源幸達マフィアは俯いていた。

「はは……俺達マフィアがこいつなんだ。」

健人は笑いながらいつた。
だがその笑顔はわざとらしく、
絶望に染まっていた。

「しかたないだろ、あんな数じや、俺たちに勝ち目はない。」
大羽はそう言つた。

力難はそこへ言つた

「だけじゃ！」のままじことしてたらいつか見つかっちゃう！それに食料も少ないんだぞ！食糧を手にするためにどれだけ仲間が死んだことか

「わかつてゐ！でも手の打ちどころがない……！」

僕は大抵黒でしまった

その音と同時に住民が悲鳴を上げた。なぜならその音はマフィアの口笛がやつてきた合図なのだ。子供は泣き叫び、大人たちは逃げ道がないか探している。

ズダダダダダダダン!!

「ぐああああああああああ!!」

外を見張っていたマフィアが断末魔を上げた。

卷之三

卷之三

マフィアロボがやつてきた。雷斗は住民の波を搔い潜りマフィアロボに銃を向ける。第一人目の犠牲者が出た。マフィア達も武器を持ち、マフィアロボを撃つ。犠牲者がどんどん増えていく。

そして三分後。マフィア口ボが全員倒れた。住民が半分減った。辺りは紅に染まっている。源幸は手榴弾を投げ、穴を開けた。住民は源幸を突き飛ばして逃げていく。

— T₁ T₂ T₃ T₄ T₅ T₆ T₇

健人は全員をビルの外に追い出した。そして手榴弾の安全ピンを抜いた。

「健人！」

健人は手を親指以外の指を閉じて、大翔に向け笑った。

「後は頼む」

大翔はそう健人が訴えているのを感じた。そして

ズドオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

ビルは跡形もなく崩れてしまつた。

假人

「でもボス！」

「健人の犠牲を無駄にしたくはないだろ？急ぐぞ」

雷斗たちはビルを後にした。

今日は風がよく吹いている。まるで人々の涙を乾かすために。だがそれでも星美は涙を流し続けた。

「…雷斗」

「なんだ？」

「私たち、本当に生き延びられるのかな」

「知らない。だが、あきらめてはいけないとと思う。それだけだ

「…」

「源幸、どこに行くんだ。」

「フェアリーマウンテンに向かう。あそこはマフィアロボ達が少ないだろう。」

「だが、妖精たちは？」

「それはいないらしい。」

「そうか。」

辺りは何もなく、あるとすれば人の死体だけだった

。

復讐の部隊

ザクザクザクザク……

雷斗たちはフェアリー・マウンテンのふもとにいた。妖精はなぜかどこにもいない。

「変……だな」

と、雷斗。

「ああ、噂どおり、ちつともでこねえ」

源幸。

「なんか……不気味」

星美。

「とりあえず、どこか身をひそめる場所を探そう」
最後に大翔がそういった。ほかのマフィア達も進んでいく。
後ろから銃声がする。あの廃墟から逃げて行つた住民たちはおそらく殺されただろう。

……あのマフィアロボ達に。

「く……」

大翔は拳を強く握っていた。なにせ、あの仲間の健人が殺されたのだ。マフィアロボ達に対する怒りは計り知れないほど強いだろう。

「あれは？」

星美は一点を見ていた。見るとほら穴がある。雷斗たちは走り出した。

した

「いやああああああああああああ！」

一人の女が悲鳴を上げた。ほかの者たちも恐怖に怯えている。総勢40人ぐらいだろうか。

「ヘッヘッヘ。オマエタチモココデオワリダ」

その者たちはマフィアロボ達の銃を見ていた。銃は黒く光り、悪

魔のようにも見える。

「シネエ！！」

ズダアアン！！

それはマフィアロボ達の頭を完全に撃ち抜いていた。ガシャンと音を立て倒れる。

女がマフィアロボの先に見た物は銃を持った金髪の男だった

「お前たちもマフィアロボから逃げてきたのか？」

「はい。ですが……」

「僕は両親を殺されました」

「私は夫と子供をさらわれました」

「俺は仲間を……殺された」

「……」

大翔は黙つてその話を聞いていた。

「ボス

「なんだ、大翔」

大翔は立ち上がった。

「俺、あいつらをぶつ潰しに行きます」

「そうか」

「ボス。今までお世話になりました」

大翔は森へ去つて行つた。その時源幸も立ち上がつた。

「さて、戦争の始まりだ」

めに。

大翔はドラム缶に隠れていた。相手からの銃弾を防ぐた

大翔の前にはマフィアロボが五人。明らかに大翔のほうが不利だ。さらに、一人はガトリング砲の発展形であるM61バルカンを持っている。

ついに弾がなくなつた。大翔は死を覚悟した。

「すまない、健人……」

その時、雄たけびが後ろからするのが大翔には分かつた。それと同時に銃弾が降つてくる。

大翔は振り返つた。見えたのは雷斗たちが走つてきている姿だつた。中にはマフィアロボにおびえていた集団の男たちもいる。

「大翔！」

「ボス！ なんでここに」

「それは後だ！ いまはあいつらを片付けるぞ！」

源幸は走つて行つた。大翔も行こうとしたが足が動かなかつた

ドサア……

ついに最後の一人が倒れ男たちは雄たけびを上げた。死者、負傷者はゼロ。まさに奇跡だ。

「星美、待機している男たちをここに呼べ

「ボス」

「ああ大翔か」

「なんでここに来たんですか？」

「そりや、お前を助けるためさ。それに俺たちは復讐レジスタンスの部隊を結成したんだ。だが、一人足りなくてな。今、あと一人募集中なんだ」

「俺……」

「なんだ？」

「…………… お願いします。復讐の部隊に入らせてくれださい。お願いします！」

大翔は頭を下げた。源幸の手が拳がついた。

「バカヤロー！ 良いに決まつてんじやねーか！」

そして大翔を叩いた。一人は笑つた

復讐の部隊リスト（前書き）

これを見ながら小説を読んでもいいと思します

復讐の部隊リスト

- A、アルファチーム 熊堂源幸、前田信也、実海藤健一、小垣桂太
- B、ブラボーチーム 要人大翔、高木亮、武田幸樹、土井新輝
- C、チャーリーチーム 熊堂星美、堀川成鬼、石川流星、井川洋二
- D、デルタチーム 月牙雷斗、神谷紳太郎、吉原学、奥谷健一
- E、エコーサイド 甲賀雄一、神崎洋介、谷岡一月、五里泰雅
- F、フォックストロットチーム 佐藤慶太郎、鈴木太郎、高橋浩二、赤塚真一
- G、ゴルフチーム 賀川龍平、積実勉、晒谷大貴、笠川慶介
- H、ホテルチーム 佐々木雄太、渡辺達樹、森田真崎、田中亮太
- I、インディアチーム 勝山懸河、近藤信介、永淵伊織、福岡和樹

総勢36名。

復讐
(1)

「まぢは！」）から南にある武器倉庫に集合だ。詳しく述べ地図を見てくれ、何かあつたら無線機で呼んでくれ。以上だ、解散！…」
周りの者たちは一斉に駆け下りていった。

「行くぞ雷斗」

丁丁丁丁丁

雷斗の右隣にいる神谷紳太郎は辺りを警戒していた。後ろには吉原学がいる。前にいる神谷紳太郎は銃をずっと見つめていた。

金刀城

二〇一

神谷紳太郎は大学生の経済学部に所属していた青年たゞマフィア
ロボにより父と母を殺され、弟が連れ去られたと言つ。

奥谷が言つた。

俺たち……本当に生きて帰れんのか？」

「なんと中年の男がマフィアの一人を励ましてゐる。
「そうですよね……つ！ シツ！」

カシヤカシヤカシヤ……

四人の前をマフィア口ボ達が通り過ぎて行つた。

「はれてない……」

「まだこんな所にいたのか…………ガラクタどもめ…………」

『「ひづらアルファチーム

』

「この無線機からの声が雷斗たちデルタチームをピンチに陥れたの
だった

星美が率いるチャーリーチームはマフィアロボ達を前にして建物
の陰に身を潜めていた。

マフィアの一人である堀川成鬼が言つ。

「どうやってあいつらをぶつ潰す？」

「そうね……あのビルの屋上からの狙撃はどう？」「

星美は窓が割れ放題の青いビルを指差した

「うわ、散らかり放題だなあ」

「住民だつた青年、井川洋一が言つた。

「当たり前だろ」

同じく石川流星が返す。転がっていた物はパソコンや椅子や誰か
の死体だった。

「う……」

井川が口で手を押さえた。

「吐くな角の所にやれ」

井川は走つて行つた。どうやら石川流星は平氣らしく。

「慣れてるのか？」

堀川が聞く。

「リゲートビル襲撃事件の被害者だつたからな」

リゲートビル襲撃事件とは今までマフィアロボが起こした事件で
一番恐ろしい事件である。

立て籠もつていたマフィアロボが全滅した後には床は血の色に染
まり死体で埋め尽くされていたと言つ。

「まさか生存者がいるとはな」

「ああ、そのおかげでここまで生き延びられた」

『「こちらインディアチーム。聞こえるか?』

星美の持っていた無線機から声が聞こえた。

「こちらチャーリーチーム。いつたい何が起こつたの?』

『俺たちは今広場の近くにいるんだが、マフィアロボがいて進めない。手を貸してくれないか?』

「わかつた。そこにビルは見える?』

『青いビルが見えるぞ』

「うん。そこに私たちが居るの。その屋上からマフィアロボを狙撃するから、マフィアロボの注意が私達に引いたらそこを攻撃して」

『わかつた』

『さて、行くわよ』

カツカツカツカツ……

ビルの屋上はほとんど鏽びていて柵は所々凹んでいた。

下にはあの広場があった。星美は無線機でインディアチームに通信をした。

「こちらチャーリーチーム。今からマフィアロボ達を狙撃する』

『了解』

堀川成鬼は背中にじょつていたゴルフバッグから狙撃銃を取り出した。

レミントンM700である。それをフェンスの隙間に入れた。

堀川成鬼は10倍のスコープを取り付けた。そして片目を瞑った。

ズダーン!!

レミントンM700から放たれた銃弾はマフィアロボの頭を撃ち抜いた。

数分後、無線機から声が聞こえた。

『こちらインティアチーム。マフィアロボを全員ぶつ潰して倉庫に隠した。こちらは移動するからそちらもマフィアロボが来る前に移動してくれ』
「わかった」

だがマフィアロボはすぐそこへ迫っていた

復讐（2）～やけくそ～

銃弾が壁を削る。雷斗率いるデルタチームはマフィアロボから攻撃を受けていた。

『もうお前たちしかいないんだ！！』

「わかったよ！　すぐぶつ潰していくからー。」

雷斗は通信を切り、壁を登った。

「あんたらはそのまま銃をぶつ放しとけ！」

「で、でも……」

神谷が戸惑う。だが吉原は銃を壁から突き出し、標的も見ずにトリガーを引いた。

「でたらめでも撃った方がましなんだよー！」

奥谷も壁から銃でマフィアロボを撃つ。神谷もついに銃を握った。

「おらおらおらーー！　死にやがれええええええーー！」

なんと神谷は広場に向けて走り出しマフィアロボに突進した。

「なっ……」

神谷はさらにもマフィアロボに飛び蹴りを喰らわせ、口に銃を詰め込みトリガーを引いた。

だが後ろにいたマフィアロボが神谷に銃を向けた。

「させるかーー！」

上空から雷斗が飛んできた。雷斗はマフィアロボと反対方向に顔を向けそのまま急降下してマフィアロボの脳天を蹴り落とした。マフィアロボはガラガラと崩れる。

「無理すんなよ」

「あ、はい」

一人が後ろからやってきた。

「お前、性格変わつてなかつたか？」

「あのときはやけくそになつたんですよ」

「いや、それでも」

「さあ、早く武器倉庫に向かいましょう」

「あ、逃げた」

星美率いるチャーリーチームはさつき来たマフィアロボと交戦している石川を残してビルの端に捕まってぶら下がっていた。

「行くぞ！」

堀川が勢いをつけ窓を突き破り下の階へ飛び移る。

「次はあんたよ！」

「ええっ！！」

星美が井川に呼びかける。井川はまだ勢いをつけていなかつた。

「仕方無いわねっ！」

星美が井川を蹴る。井川は吹っ飛び堀川の所に飛んで行つた。

「もう大丈夫。じつちにきて」

「わかつた」

星美も飛び移つた。だが、石川がいつになつても来ない。

「まさか……」

星美は井川を突き飛ばし、階段を上つた。

星美が見たのは石川の姿だつた。なんと木箱がそこにある。

「まさか……」

「大丈夫だ。やけくそなら何とかなる」

石川は木箱を押した。

「やめろっ！」

星美は走つたが出口は木箱に塞がれた。そして何かの断末魔の叫びが聞こえた。

「くそっ」

後ろにいた堀川が言つ。星美は大きく息を吸い込んだ。

「ふざけんなああああああああああああああ！」

大翔率いるブラボーチームでは、大翔が車の電線を弄っていた。

「あいつらは？」

「まだ大丈夫。気付かれてない」

物陰から顔を覗かせている高木が大翔からの問いに答える。

高木が見ているのはマフィアロボ達だつた。武田は銃を扱う練習をしていて、土井は車をじっと見つめていた。

武田は十代の若い男であり、本当はフェアリー・マウンテンに隠れていることになつていていたのだが自分から部隊に入ることを決めた。

土井は五十代の男であり、娘を奪われたと言ひ。高木はマフィアの一員である。

「ちょっと貸してみな」

土井は大翔を車から降りさせた。

「これでも車関係の仕事をやつていたものでね」

土井が電線を弄つて二分。車にエンジンがかかつた。

「三人とも乗るか？」

大翔は助手席、高木と武田も後ろに乗つた。

「よし、行くぞ」

土井はアクセルを踏んだ。車は物陰から姿を現した。車を銃弾が襲う。どうやら気付かれたらしい。

「体当たりするぞ」

「ええっ！？」

武田が止めようとしたがその時には土井はハンドルを回していた。

「やめろおおおおおおおおおおおお！」

ドゴッ……

マフィアロボ達は吹つ飛んだ。車は少し凹んだ。

「……すげえ！」

「もつとやつちまえ！……」

「もういない」

だがマフィアロボはすぐ戻ってきた。

「体当たりだ！」

「いや、そのまま行くと壁にぶつかってしまう」

「だったらやけくそだ！スピードを上げて乗り捨てるつ！」

土井はシートベルトを外し、ドアのカギを開けた。車は時速100キロでマフィアロボに突進していく。

「今だつ！」

四人はドアを開け、飛びだした。瞬時に爆風が襲う。マフィアロボは消えて無くなっていた。

復讐（3）～逃走 凡人＆超人対超人～

源幸率いるアルファチームでは武器倉庫周辺で交戦していた。武器倉庫にはマフィアロボが待機していたのだ。アルファチームのほかにもゴルフチームとエコーチームがマフィアロボ達と交戦している。

「くそつ、きりがない」

源幸率いるアルファチームはマフィアは源幸一人で、ほかの三人は一般人。攻撃力は少ない。

「ゴルフ、エコーチームは応援にきたマフィアロボ達を足止めしている。完全にこちらの方が不利だ。」

「源幸！」

後ろから雷斗たちがやつてきた。

「やつときたか！」

「すぐにぶつ潰してやる……って、何だこの数は！…」

マフィアロボは今も増え続けている。今ではもう百人近くいる。足止めが効かなくなつたのも事実だ。

「これの出番だ」

雷斗は背負っていたM A S 半自動小銃を持った。

「久しぶりだな、これを使うのは」

雷斗は銃を構えた。物陰から出て行こうとしたが、銃弾が止まない。

「くそつ身動きができない」

その時、トラックが走ってきた。

トラックはマフィアロボを轢き、武器倉庫の入り口で止まる。中のコンテナからフォックストロットチームとホテルチームが出てきた。

「行くぞおおおおおおおおおおおお！」

フォックストロットチームとホテルチームは物陰に隠れ、マフィ

アロボと交戦する。

ドアが開き、プラボーチームが出てきた。

「仲間を集めてきた！！！」

プラボーチームはアルファチームに駆け寄る。

「よし。これで倒せる」

だが、源幸の予想は外れた。

あのカプセルを奪つた男がやつてきたのだ。

「お前は……」

「逃げろーー！」「いつはやばい！！！」

大翔がそう言つた瞬間、ホテルチームの一人が蹴り飛ばされた。

「くそっ」

近くにいた高木が男を撃つた。だが、やはり銃弾は効かなかつた。

「逃げる！！」

復讐の部隊達は散らばつた。男はどうやら雷斗に田をつけているらしく。

男はゆつくりと、近づいていく。

「く……」

トットシットシットシット……

雷斗はあるデパートに逃げ込んだ。

「お前らもどこかに隠れろ」

三人は頷き、雷斗のもとを去つて行つた。

雷斗は商品が置かれている台の下に隠れた。台の下は布で隠されている。

「くそっ…………こんな時になんで

「

「ツツツツツツ……

足音が聞こえる。ついにあの男がやってきたのだろう。

「……」

雷斗は息をひそめる。その時突然ガラスが割れる音がした。外を見ると誰かが男と戦っていた。その顔はフェアリー・マウンテンで見たことがある。

チャーリーチームの石川流星だ。

石川が持っていた刀を振り下ろすと男は白刃取りをして回転しながら壁に叩きつける。そして刀を取り上げた。雷斗は思わず飛び出し、コルト・パインソングのトリガーを引きながら男に体当たりした。男は仰向けに倒れ、雷斗は石川の手を握り男から離れていく。

「すまない」

「お前、なぜ一人なんだ？」

「その話は後だ。とりあえずこの男をなんとかしなければ……」

石川はもう一つの刀を雷斗に渡した。

ダッ!!

石川は走つて刀を縦に下ろす。男は横にすれすれで避けた。

まさに紙一重。

石川は斬撃の連打を繰り出すがこれも紙一重で避け、男が石川を蹴り飛ばす。

次は雷斗が刀を構え走つてきたが、男は拳銃を出して撃つてきた。雷斗はぎりぎりで避け、男はすぐに拳銃を仕舞う。

まるであの大気ホラーアクションゲームのウェーカーである。

石川は何とか立ち上がり刀を投げた。しかし刀は男の人差し指と中指によって取られ、逆に男の武器になってしまった。

「くそっ」

石川はグロック17を取り出した。

「やめろ！あいつは銃が効かない！」

「なんだって！？」

石川はトリガーを引いた。たしかに効いていない。

「くそっ……」

石川は走つてどこかに行き、非常に長いL字金具を持ってきた。
(ネジを入れて固定するアレ)

「トンファの代わりだ！」

そう言って突進した。

「だめだ！ 無茶すぎる！」

だが、意外にも互角だった。

「二人とも超人かよ……」

復讐（4）～リミッター解除～

ガキインー！

「く……」

「そろそろ疲れてきたようだな」

「いや……まだまださー！」

石川がレ字金具を持つてから十分。まだ死闘は続く。
「あの二人が戦っている間に何とかあいつらを探さなければ……」

雷斗はデパートの中を走っていた。

「神谷ーーーーー！ 吉原ーーーーー！ 奥谷ーーーーー！」

そう言いながらゴミ箱の蓋を開ける。

「いないーーーーー！」

次はトイレットペーパーの山を崩す。

「いないーーーーー！」

雷斗が冷蔵庫のドアを開けようとすると声が聞こえてきた。

「……何してるんだ？ 雷斗」

雷斗が後ろを振り向くと奥谷たち三人が立っていた。

「ど、どこにいたんだ？」

「ずっとついてきたんだが」

次は吉原が言う。

「そ、そななの？」

「もしかしてわかつてなかつたんですか？」

神谷。

「う、うん」

「馬鹿だろお前」

最後に奥谷が止めの一言を言った。

「…………」

「…………」「」

「とりあえず、ここから避難しよう。あの男は大丈夫だ」

「わかった」

雷斗はデパートの入り口まで三人を導いた。

「ここから、武器倉庫に行くんだ」

「え？ 雷斗さんは？」

「ここに残る」

「何でだ？」

「俺はこう見えても優しい一面があるんだぞ？」

雷斗は三人を見送り、あの二人のもとへと走った。

石川は腕に傷を負っていた。

「大丈夫か！？」

雷斗は石川のもとへ駆け寄った。

「く……」

「おい！」

「……雷斗か」

「大丈夫か！」

「あれを見ろ……」

石川は男を指差した。男の服が破けていて心臓部にクリスタルが貼られている。

「あれが弱点だ……あれを銃で攻撃しろ……刀では効かない……」

「わかった」

「……くつ

「石川は気を失ってしまった。

「弱点は見破られたが、それでもお前はここで終わりだ」

男は刀を投げた。咄嗟に近くにある箱でガードする。

そして雷斗は銃を取り出した。だが、その時には男は目の前にいた。

ビュッ……

雷斗は前転で避けた。後ろにいた棚には穴が開いていた。

「あの手は槍並みだな」

ホルスターから一丁のコルト・パイソンを取り出し男に向ける。だが男はすでに雷斗の後ろにいており、雷斗は蹴り飛ばされ、M A S 半自動小銃を奪われてしまった。

「くそつ！」

雷斗はテーブルを蹴り飛ばしてくる。突如に銃弾が襲う。テーブルの台は傷だらけになってしまった。

銃弾が止んだ時にはすかさず飛び出し銃を撃つ。だが、男は既に居なかつた。

力チャ……

雷斗は後頭部に銃口を押し当てられていた。

「神に祈る時間を少しあらうか？」

「……生憎、俺は神とか言う奴を信じちやいない。昔からね。それ

と

「

「お前も神に祈ったほうがいいんじゃないか？」

「何？」

「

バシュウ……

一つの銃弾が胸のクリスタルを壊した。

「ぐ…………が…………」

男はそのまま倒れてしまった。

「雷斗。大丈夫か?」

「星美。なんでここに?」

「このバカヤローを探しに来たんだよ」

星美はブレン・テンをホルスターに仕舞い、石川を蹴った。

「ほり、早く起きやがれ」

「ぐ…………」

「けつ…………無茶しやがつて」

星美はあのビルで拾った救急キットを使って石川を治療した。

「…………ほかの奴らは?」

「先に武器倉庫に行つたよ。早く行くぞ」

星美は石川に肩を貸した。

「雷斗、先にリードをしてくれ」

「お、おう」

雷斗は銃を構え、警戒しながらデパートを出た。

「…………誰もいないようだ」

「そつか…………」

雷斗たちは武器倉庫へゆっくり進んでいった。

「え……ちつ」

デパートの中で倒れていた男はクリスタルに埋められていた銃弾を抜いた。

「まさか他人の力でリミッターを解除してしまうとはな」

ズドオオオオオオオオオン!!

男は正拳突きで壁に穴を空けた

「ない！　ない！　ないぞ！！」

「くそつ……どこにあるんだ！？」

雷斗と星美は武器倉庫で武器を探していた。だが閃光手榴弾二個以外何も見つからなかつた。

「……どうしたんだ？」

休んでいる石川が星美に聞く。

「武器が無いんだよ！！　まさか……私たちの分はこれだけ……？」
「んなわけないだろ。ここは結構武器があつたんだ。そう簡単になくなるもんじやねえだろ」

雷斗は一度ここに来たことがある。依頼で武器を盗んだのだ。

ガサツ……ガサツ……

星美が軽い木箱を入り口に押し出す。

「……星美、来てみる」

「どうしたんだ？」

星美は再び木箱を押し出して雷斗の所へ向かつた。

「これってなんだ？」

そこには地下に降りる扉があつた。

カツカツカツカツカツ……

星美と雷斗はその先に向かった。石川は雷斗に肩を貸されている。
「ここは？」

そこは小さな部屋だった。机が一つ。椅子が八個並べられている。
椅子には雷斗と星美のチームの仲間がいた。

「やつときたか」

奥谷。

「石川も無事か」

堀川。

「心配掛けさせるなよ」

吉原。

「みんな、すまない」

石川は笑いながら言った。

「源幸達は？」

「先に行つた」

「どこに？」

「奪われた武器を探しに行くだとか。俺たちも行くか？」

「決まってるよ。父さんばかりに活躍させたくないからね」

星美はホルスターからブレン・テンを引き抜いた。

「ぐ……」

石川が壁に倒れる。

「お前はここで休んどけ。行くぞ」

雷斗は扉へと歩いて行った。

「……待て」

「なんだ？」

「絶対回復して追いついて見せるからな」

「やつてみる。とりあえず死ぬなよ」

雷斗とその仲間達は石川流星を残して武器倉庫を出た。

「よし、ここからはチームに分かれて武器を奪つた奴らを探す。まずはそれからだ」

「OK」

チャーリーチームは武器倉庫から出て行った。

「よし、俺たちも行くぞ」

「……ちよっとまて」

奥谷が雷斗たちを止める。

「何だよ一体」

「バイクの免許持ってるか?」

全員がうなずく。

「なら、行けるな」

奥谷はある所を指差した。ある所とはバイクショップのところだつた。

復讐（5）～暴走族（仮）～

「絶対逃がすな！！ 追え！！」

源幸がそう言いながら一つのトラックを撃つ。

「わかつてゐるよ！！」

横にいたアルファチームの前田信也が銃で撃ちながらトラックを追いかける。

ここは今は廃墟と化した大通り。その真ん中でアルファチーム、エコーサーチ隊、フォックストロットチームが武器が積み込まれたトラックを追いかけていた。

トラックにはマフィアロボが一体。時速は20？。源幸達は体力が限界にまで来ていた。

源幸は無線機を取り出した。

「おい！ 仲間たち！ 聞こえるか！！ 今武器が積まれたトラックは……キンジル大通りにいる！！ 早くこっちに来い！！」

それはバイクに乗った雷斗達にも聞こえていた。

「よし！ お前たち！！ キンジル大通りに急ぐぞ！！」

雷斗達はスピードを上げ、道路を爆走していった。

「キンジル大通りって、ここよね……」

石川流星除くチャーリーチームは路地裏からキンジル大通りに出た所だった。

「オオオオオオオオ……」

星美達の左側から一台のトラックが走ってくる。

「まさかあれが武器を積んだトラック？」

「どっちでもいいが潰す！」

そう言いながら堀川成鬼が銃で運転席の窓を撃つ。

ズダン！ ズダン！ ズダン！ ズダン！

ガシャアアン！！

窓は四発で割れてしまった。

「次はタイヤ！！」

堀川が右へ走りながら左手で銃を持ちタイヤに狙いを定める。だがうまく標準が合わない。

「立ち止まつたほうがいいな」

堀川は立ち止まり確實に当てるよう標準をタイヤに向けた。

バシュウッ……

「くそっ！！ あのトラック急にスピードをあげやがった……」「これって……？」

井川洋一が拾つたのはトラックが落とした銃だった。

「ぜえ……ぜえ……クソッ」

源幸は膝に手をついていた。他の者たちも疲れ果てている。

「お……おい……」

前田信也が源幸に話しかける。

「なんだよ……つー？」

源幸が見たのは爆走するバイクの集団だった。雷斗が乗っている。

「暴走族（仮）参上！！」

「ら……雷斗？」

「源幸！！ トラックはー？」

「もう先に行つた……そのバイク

源幸が後の言葉を言おうとした時には雷斗達は去つて行ってしまった。

雷斗達が源幸の所を去つてから五分。トラックはまだ見えなかつた。

「もうこの大通りを抜けたんじゃないかな？」

吉原学がそう言う。

「そうかもしれないな……」

「あれは……星美さん？」

「なんだって！？」

神谷が指差した所を見ると手を振つている星美の姿が見えた。

「トラックはどこに行つた！？」

「もう先に行つた！ 私も乗せて！…！」

「これも持つて行け！…！」

「何？」「

井川が星美に渡したのはトラックが落とした銃、トンプソン・サブマシンガンだった。

「ナイス！」

星美はそれを受け取り、雷斗と共にその場所を去つた。

「雷斗……」

星美が叫び雷斗は身を屈め星美がトンプソン・サブマシンガンでタイヤを撃つ。

トラックは左右に揺れながら走つていた。

「くそつきりがない！」

雷斗はコルトパインソングを取り出し、スピードを上げてトラックと並んだ。

「星美！ 運転頼む！」

「えつ……ええ！？」

雷斗は星美の手を握つてハンドルに持たせた。

「私……運転なんかできないわよ」

「バランス保てば何とかなる！」

雷斗はそう言い、トライクに飛び乗つた。

「いやあああああああ！」

バイクがどんどん離れていく。雷斗は中にいたマフィアロボを撃ち、

運転席の中に入った。

雷斗はマフィアロボを蹴り飛ばしてブレーキを踏んだ。

キイイイイイイイイイイ

卷之三

「エトリックは煙を上げながら止めた。

ガーン！

大丈夫か？

「足が抜けない」

星美の左足がバイクに挟まれていた。

二二

雷斗はバイクを掴んだ

二〇一九年九月三十日

二〇一〇年

「別にいいさ」

星美はバイタ

星美はバイクから抜け出してトランクのコンテナの扉を開けた。中には箱が入っており、中には手榴弾やアサルトライフルなどが入

つていた。

後から吉原たちがやってきて後に復讐の部隊全員（石川を除く）が集まることとなつた。

復讐（6）～アジトの居場所～

「ヒヤツハー！ 武器がいつぱにじやねえか！！」

前田信也が叫んだ。他の者たちは銃を肩にかけたりホルスターに入れたりしている。

「よくやった。雷斗」

源幸が雷斗を褒める。雷斗は腕を組んで考えていた。

「どうしたんだ？」

星美が雷斗にその訳を聞く。

「こんなに武器を持つていても、マフィアロボに勝てるのか？」「そりゃ……そうだ」

「俺はそつは思わないな。敵の銃神団はどんどんからかマフィアロボを送り込んできやがる。俺たちは弾にどうしても限りがあるんだ。だから銃神団のアジトを叩かなければ意味がないんだ。どうにかして敵のアジトを見つけなければ……」

「……」

その時、右側の路地裏からマフィアロボ10体がやってきた。

「いたぞ！ やつちまえ！ ……」

その中には前雷斗と戦った東孝太郎がいた。ビリヤリマフィアロボを指揮しているらしい。

「全員トライクに隠れろ！ ……」

源幸が叫ぶ。全員無事らしい。危うく犠牲者が出来そうになつた。ここまで全員が生存しているのが奇跡なのだが。

「あいつも銃神団の一人だったのか……待てよ、あいつを捕えれば敵の本部を聞き出せるかも……！」

雷斗はスタングレネードとアサルトライフルのM16を持ってトライクの屋根によじ登つた。

「ショック死するなよ！ ……」

雷斗は安全ピンを抜いてマフィアロボ達に投げた。

パン！

孝太郎は怯んでいるがマフィアロボは特に変わった様子はない。
「ロボには効かないか……」

雷斗はM16でマフィアロボ達を撃つ。そしてトラックを飛び降りて銃弾を避けた。走りながら雷斗はM16を単発射撃から連発射撃に変え、弾が切れるまで撃つた。

しばらくして孝太郎の視覚と聴覚が戻った。孝太郎が見たのは銃を自分に押し付けていた雷斗の姿とマフィアロボの死体だった。

「ひつ！」

「銃神団のアジトを言え。」

「は……はい……」

孝太郎は両手を上げた。

「ウェポンビル……」

「ウェポンビルだと！！ そんなわけないじゃないか！！」

横にいた大翔が言った。

「まあまあ、最後まで聞こうぜ」

その後ろにいる高木が大翔を抑える。

「ウェポンビルの……地下……」

「地下か……確かに俺たちは地下なんて調べていなかつたな……くそつ」

大翔は地面を殴る。雷斗は孝太郎を氣絶させ、立ち上がった。

「殺すか生かすかはお前たち次第だ」

雷斗はバイクに乗つて去つて行つた。

孝太郎は氣絶したまま誰にも殺されず取り残された

。

擦り傷

「……懐かしいな」

雷斗がウェポンビルを見上げながら言つ。ウェポンビルは少し穴が開いていた所もあつたが原型は留めていた。

「俺は今も、ここで起きたこと全部覚えてる」

大翔はそう言いながら拳銃をホルスターから取り出した。源幸が復讐の部隊の前に立つた。

「今まで全員無事で來たが、ここからは敵の本拠地だ。誰かが死ぬかも知れねえ。だけど、自分が生き残つたら、後ろの奴も生き残る！ それだけは忘れるな！ いいな！！」

全員が頷く。

「行くぞおおおお！！」

復讐の部隊達はウェポンビルへと進んでいった。

その時。

タツ。

復讐の部隊の前にあの雷斗と石川が戦つた男が立ちふさがつた。

「なつ……」

「ここからは通さない」

「お前……死んだはずじゃ……」

男の心臓部には割れたクリスタル。

「リミッターを解除した。もうすぐ俺は爆発するが、その代わり俺は超人的な力を手に入れた。お前たちの敗北は間違いない」

「要はそれまで時間を稼げばいいんだろ」

雷斗が銃を抜き、構える。後ろの者たちも一斉に銃を構えた。

「必ず一人で死んでみますよ」

男は雷斗達に突進した。雷斗はトリガーを何回も引いているが男は素早く避けていた。

スパンンッ！！

「なつ……」

雷斗が持っていた二丁のコルトパインズは一瞬で弾かれてしまつた。男はミドルキックで雷斗を蹴り飛ばす。

「雷斗！！」

星美が持っていた三個の閃光手榴弾の安全ピンを抜き、男に投げつけた。男は冷酷な表情でその三つの手榴弾を見つめていた。

パパパン！！

手榴弾が爆発し、閃光が辺りを照らす。だが、そこに男の姿はなかつた。

「いつたいどこにいる……？」

雷斗は銃を拾い、構えながら警戒する。

「上だ！！！」

前田信也が叫ぶ。上空を見ると、男が幾つもの手榴弾を持って落下してきた。

バコッ……シユツ

男が地面に着き、地面にひびが割れ、男は全方向に手榴弾を投げた。

「つー？ 逃げる！！」

雷斗が言つたが、既に遅く、数名が破片と化してしまつた。初めての犠牲者。

「くそおおおおーー！」

大翔が男を撃つ。男は銃弾を一個づつ避け、歩きながら大翔に近づいていた。

そして右手を手前に引いた。

「あれは……っ！！ 大翔！！ 逃げろ！！」

雷斗は叫んだ。だが、大翔は怒りの余り、その場から離れなかつた。

そして大翔の弾が切れた。大翔は立ちすくんでいる。男が腰を曲げた。

ピュッ……

「ぐつ……！！」

源幸が大翔を飛び押しした。大翔は助かつたが、源幸は背中に掠り傷を受けてしまった。

「ぐはつ！」

源幸が男の前に倒れる。男は銃をホルスターから抜き、源幸の後頭部に当てた。

その時、雷斗が走り出し、飛んで両足で男の顔を蹴りとばす。男は地面に顔を擦り、怯んでいるようだつたが、雷斗は両足を押えていた。源幸は前田に遠くに運ばれる。

「どうした！ 雷斗！」

星美が雷斗に駆け寄る。

「あいつの頭……固い……」

星美は男を見た。男は顔を擦り剥いているはずだったが、出血していなかつた。

だが擦り剥いた所には銀色の物が埋め込まれていた。

「お前……まさか……」

「そつ。俺はロボットだ」

男は擦り剥いた傷から皮を頭から足までを全て剥いだ。

そこに居たのは男ではなく、赤い眼をした銀色のロボットだった

雷斗は走った。

元男のロボットは雷斗に向かつて走り出す。雷斗は一丁のリボルバーでロボットを撃つが、標的は樂々と避ける。

「あのポンコツがあ！！」

源幸はアサルトライフルでロボットに集中砲火を浴びせる。

「あのポンコツを撃てええ！！」

復讐の部隊達は一斉にロボットに向け発砲した。ロボットは避け切れず被弾し、動きが止まつた。

「雷斗、先に行け！！」

「大翔ふざけるな！ 僕もここに戦う！！」

「ここは俺たちに任せろ！！ 早く行け！！！」

「…………わかった」「

雷斗は源幸の言つたあの言葉を思い出ししながらウエポンビルへと走つた。

自分が生き残つたら、後ろの奴も生き残る！ それだけは忘れるな！

雷斗は走った（後書き）

とつあえず「J-REI」の小説は終わりです。ご愛読、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997m/>

お前たちをぶっ潰しに来たんですが。

2010年12月4日12時25分発行